

23 juin 2007



#47 Architecture et calligraphie

第47回は、20世紀最大の建築家であるル・コルビュジエ展情報と、モロッコの書道家フィラリ・ババさんのインタビュー。フランス語レッスンは、覚えておくと会話に便利な表現をいくつかピックアップしています。

☆パーソナリティ

ポプ & ちなみ

☆今週のゲスト

イーデン コーキルさん
森美術館 広報部 チームリーダー

Filali Baba
calligraphe marocain

☆情報

「ル・コルビュジエ展
建築とアート、その創造の軌跡」

六本木ヒルズ森タワー53階
2007年5月25日～9月24日

Générique et intro

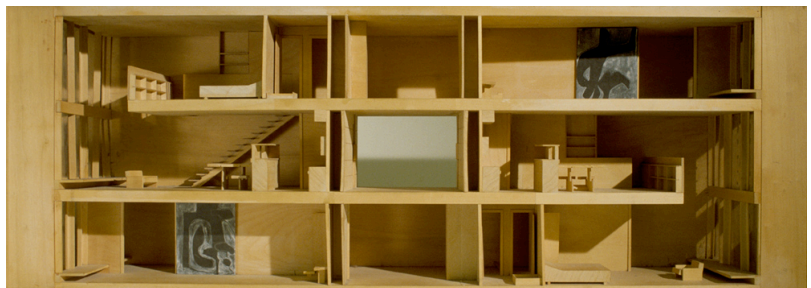
Le 23 juin 2007, quarante-septième numéro de chocolat, magazine bilingue français – japonais.

L'architecte Le Corbusier sous tous les angles au Musée Mori de Roppongi

Filali Baba, un calligraphe marocain à la fête de l'Afrique à Hibiya.

「ル・コルビュジエ展」

東京六本木、森美術館にて開催中のル・コルビュジエ展に行ってみました。お話いただきましたのは、広報部・チームリーダーでいらっしゃるイーデン・コーキルさんです。彼には昨年アフリカリミックス展でお会いしています。相変わらず達者な日本語とこぼれる笑顔にて対応してくださいました。ル・コルビュジエは近代建築の始祖といわれ、これまで数多くの建築作品を手がけています。彼の建築のみならず、絵画や使用していた家具やパイプなどが展示され彼の息づかいが感じられます。特に圧巻なのは、美術館内にパリのアトリエを実寸大で再現していたり、集合住宅の代表作であるマルセイユ・ユニテ、そして彼が晩年を過ごした別荘キャバノンが作られています。実際中に入ってその感覚を体感できるのは面白い体験でした。



《マルセイユのユニテ・ダビタシオン 模型》 所蔵：ル・コルビュジエ財団 ©FLC

覚えよう petit à petit ♪

tente

テント

coiffé de...

...を被った

calotte

ふちなし帽

assis

座った

pile

堆積、積み重ねたもの、山積み

plume

ペン

calligraphe

書道家

marocain

モロッコの

calligraphie

書法、書道

phonétique

表音の、音声の

arabe

アラブ(語)の

lettres alphabétiques

字母

écrire phonétiquement

表音文字で書く

latin

ラテン語(の)

vice-versa

逆もまた(然り)、反対に

comme...

たとえば...など

s'approcher

近い、似ている、近づく

volonté

意志、意欲

réussir

成功する、うまくいく

foot(= football)

サッカー

marquer

記す、記入する

au milieu

中央に、真ん中に

ressembler

似ている、類似する

sens contraire

逆方向

en gras

イタリック体で、太字で

signe

記号、符号、しるし

représenter

表わす

vocalisation

母音の発声

se prononcer

発音される

Calligraphe marocain...

Sous une tente, un homme coiffé d'une calotte rouge est assis. A sa gauche, une pile de papier, dans sa main droite une plume.

Baba: Moi, je m'appelle Filali Baba. Je suis artiste calligraphe marocain.

Bob: La calligraphie marocaine, elle est phonétique alors?

Baba: Ah oui, la calligraphie arabe: on utilise des lettres alphabétiques et on écrit phonétiquement. Le nombre de lettres alphabétiques en arabe,... (elles) sont 28.

Ça veut dire, nous avons la correspondance de presque toutes les lettres... latin(es). La lettre A, nous avons la correspondance. La lettre B... C, D, etc. Bien sûr, il y a quatre ou cinq lettres qui n'existent pas en arabe, pour le latin, et vice-versa.

Comme la lettre U, comme la lettre E n'existe pas en arabe. Mais on s'approche pour écrire tout ce qu'on peut entendre.

Une Japonaise: Monsieur, Monsieur, j'ai une question... La voix s'approche. En général, en combien d'années on peut apprendre la calligraphie? Combien d'années, en général?

Bob: Cette dame vous demande combien d'années faut-il pour apprendre la calligraphie.

Baba: Tout dépend de la passion, et de la volonté de la personne. S'il veut apprendre, il peut apprendre en deux, trois mois... qu'il peut apprendre dans quinze ans et il ne peut pas réussir. C'est une passion, comme le foot, comme le tennis, comme l'art, le dessin.

Alors là, j'ai marqué "bob lenasu". La lettre L qui est au milieu, qui ressemble du dessin de la lettre L en latin, mais du sens contraire.

La lettre... Les syllabes sont écrites en gras, les petits signes représentent la vocalisation, ce sont les accents et les voyelles.

Bob: Et ça se prononce de la même façon, en marocain ou en arabe?

Baba: Alors là, étant donné qu'il n'existe pas la lettre E pour marquer "Lenasu", alors j'ai marqué Bo-bu Li-na-su. Vous avez compris?

Une japonaise: oui, merci beaucoup.

Bob: merci beaucoup.

Baba: Merci!

petite leçon: ぶんぼう一口メモ

A) よく使う便利な表現

会話でよく使う便利な表現を二つとりあげます。

1) **vouloir dire** (意味する)

《**vouloir dire**》は、語の意味を説明するさいに使うだけでなく、もっと広く、「要するに、～ということです」と、前に述べた事柄の要点などを言い換えて説明する場合にも用います。

Ça veut dire...(それが意味するのは)

ババさんは、アラブ語の字母は28字あるが、「つまり、それらがラテン語の字母とほぼ対応するということなんです」と説明するさいに、この表現を使っています。

例) **Qu'est-ce que ça (cela) veut dire ?** (それはどういう意味ですか?)

くだけた言い方では: **ça veut dire quoi ?** (どういう意味?)

Ça (cela) veut dire que ... (つまり、...ということです。)

2) **dépendre de...**(...による、...しだいである、...に左右される)

「～しだいだ」とか、「時と場合による」といった事を述べるさいに便利な表現です。

Tout dépend de la passion, et de la volonté de la personne.

(すべてがその人の情熱と意志にかかっています。)

「アラブ語の書字法を学ぶにはどのくらいの時間がかかりますか?」という日本人女性の質問に答えて、ババさんは、「それはすべてその人が情熱をもって強い意志で勉強を続けるかどうかにかかっています」、と答えています。

また、よく使われる言い回しとしては、つぎのがあります。

例) **Ça dépend.**(それは場合によります。)

B) 会話に多い文法的誤り

現実のなまの会話では、話し手の言葉にときおり文法的誤りがあることはすでにお気づきのことと思います。そうした誤りは、一般に、文章よりも日常会話に多くみられますし、また、話し手がフランス語圏の人でも、フランス語が母国語の人よりもそうでない人のほうが間違えやすいことは言うまでもありません。

ババさんも、フランス語圏ではあってもモロッコ人で、母国語はアラブ語なので、男性形/女性形、単数/複数などの混同がいくつかみられます。とはいえ、そうした誤りがあっても、彼が言いたいことは十分明瞭に伝わってきます。

日本人は、間違いを恐れ、あるいは完ぺきを求めるあまり、かえって黙り込みがちで表現しない傾向が強いとよく言われます。語学の上達のためには、間違いにこだわらず、人目を気にせずに、できるだけしゃべり表現するほうが得策でしょう。

フィラリ・ババとアラブ書道

モロッコのアラブ書道家フィラリ・ババさんは、もとは輸出入業務に携わる商社マンでした。しかし、あるとき心臓病で倒れてしまい、それでも家族のやっかいにならずに自分の力で生きていきたいと考え、アラブ書道を始めました。そして今は病をのり越えて、コーランの一節やとくに客の名前などを、装飾を凝らしたアラビア文字で書き記すことに生きがいを見出し、それを生業として世界中を旅しています。アラビア語文字を神聖なものと考えたババさんは、金銭の授受を拒み、自分の仕事の代価はすべて物々交換で受け取り、食事や宿は招待を受けるという仕方で、旅の生活を続けているそうです。

インタビューでも述べられているように、アラビア語の字母は28文字で、ローマ字とは逆に、右から左に向かって書きます。これらの文字を、さまざまな書体を用いて、美しい装飾と色彩を加えながら書き記すのがアラブ書道です。書かれるのは主としてコーランの聖なる言葉です。偶像否定を説くイスラム教では、(キリスト教や仏教などと異なり)人物像、風景、静物などの具象的な図像描写を禁じているため、独特のアラベスク文様や書道などの美術様式が発達しました。

イスラーム教の寺院(モスク)や宗教学校(マドラサ)は、しばしば色彩あふれるアラベスクの抽象文様と書字による装飾でびっしりと埋め尽くされ、見るものを幻想的な美の迷宮と無限世界に誘います。そこには、砂漠に似た虚無のイリュージョンを果てしなく反復する無限世界が抽象図像と装飾で再現されているといえます。

ル・コルビュジエ — 身体を基点に創造した総合芸術家

二十世紀を代表する大建築家ル・コルビュジエ **Le Corbusier** (1887 - 1965) (本名: **Charles-Édouard Jeanneret**) の大回顧展が、六本木ヒルズの森美術館で開かれています。建築を中心に、都市計画、家具や自動車のデザイン、絵画・彫刻に至るまで、マルチな才能を発揮した総合芸術家ル・コルビュジエの全貌を知ることができます。建築の専門家だけでなく、私たち一般人も十分に楽しめる刺激的な展覧会です。

ル・コルビュジエは、美術も建築も同じ視点から捉えて「諸芸術の統合」をめざした総合芸術家です。とはいえ、彼の作品群を一瞥すると、ダリ展やピカソ展とは違い、なにか雑多な不統一感があり、「これが同じ作者の作品だろうか?」という疑問や違和感を覚える人も多いのではないのでしょうか。形や様式が違っていてもダリはダリであり、ピカソはピカソだ、と感じられますが、ル・コルビュジエの場合は、そうした同一性が外観からは感じとりにくいのです。そこで、彼の創造の基盤に何があるのかという疑問を抱きながら、代表作の一部をとりあげ簡単に考えてみましょう。

いちばん身近かなル・コルビュジエの建築といえば、日本で唯一の彼の作品である上野の《東京国立西洋美術館》(1955)です。円形の支柱があり、その上に平たい箱のような正方形が乗り、内部中央には、太陽光が差し込む吹き抜け空間があり、壁に沿ったスロープが(階段代わりに)一階と二階を斜めに繋いでいます。これが典型的なル・コルビュジエ風のイメージでしょう。

正方形と円を基本とし、装飾を廃したシンプルな形の建物は、すでに初期の代表作《サヴォワ邸》(1928)にみられます。「近代という時代に適した、機能的で最低限の装飾」のみのこの建物は、バウハウスの延長上にある近代主義的で無味乾燥な印象を与えますが、ル・コルビュジエはそこに、作りやすさと同時に自然をとり入れ、人間が住みやすい機能的空間を模索しました。彼は、「家は住むための機械である **La maison est une machine à habiter.**」という有名な言葉を残しています。

しかし、1930年前後になると、表現様式に大きな変化が現れ始め、曲線や非対称の形など、以前とはまったく逆のスタイルが登場します。そして晩年の代表作《ロンシャンの礼拝堂》(1950)で、それがきわだった仕方で完成されます。アルザス地方の丘に建つ白く美しいこのチャペルは、斜めに反りあがった特異な形の屋根をもち、見る位置に応じて姿を変え、まったく別な外観を見せます。他に例を見ない不思議な形の建造物です。ここにはかつての幾何学的形態や対称性はみられません。たしかに、白い壁面やシンプルな佇まい、室内を柔らかに満たす太陽光と陰影などは、変わらずル・コルビュジエ風なのですが。

このように、まったく異質な様式は、(ほとんど実現しなかった)多くの都市計画urbanisme案の変化 — パリの計画案とアルジェ案を比較してみてください — にも認められますが、さらに、ル・コルビュジエが生涯好んで制作し続けた絵画や彫刻に目を移すと、いっそう異なる面を感じることができます。

30歳(1917年)のとき故郷スイスを離れパリにやってきたル・コルビュジエは、幼い頃から美術が好きで、まずキュビズム(立体派)絵画に惹かれます。美術作品には友人のレジエの影響が強くみられ、キュビズム風の抽象的立体感とボリュームが感じられます。しかし、やがてピカソの表現様式を批判して「キュビズム以後」をめざし、その芸術的指針として、単純で純粋な要素である直線や方形や円などの幾何学的形態を追求する「ピュリスム」(純粹主義)を提唱します。初期のピュリスム絵画は、単純化した幾何学的構成で、ギターや瓶などの静物を描いています。しかし、1920年代末からは、豊満で肉感的な女性像が多数登場し、色彩も多様になり明るさを増します。また、男性的力や繁殖力の古典的象徴である牡牛や力強く「開かれた手」なども描かれます。美術制作は彼が建築設計のイメージを生み出す予備作業だったといえます。

では、ル・コルビュジエの異質な作品群をひとつにまとめ統合している観点は何なのでしょう？ その答は、妻のために設計し、彼自身もそこで生涯を閉じた、南仏の地中海を望むカップ・マルタンの《小さな休暇小屋Le petit cabanon》(1951)に見られます。外壁を松の丸太で覆った8畳ほどのごく質素な正方形の小屋に、彼は自分で考案した尺度「モデュロール」を適用しました。人間の理想的身長を183cmとみなし、その二倍の3.66mをこの正方形の小屋の縦横の長さとし、また、天井までの高さは、人が手を上げた高さ2.26mに設定しました。作りつけの家具類は部屋という構造体の身体機能として構想されました。また、壁には好みの牡牛の絵を描き、妻とともに過ごすべきこの究極の私的空間に、ル・コルビュジエ=ジャンヌレは、自分の主要理念を凝縮したのです。

このように、多様に異なる諸作品の背景には、共通して、(人間の)自己身体を基点にすえた物の見方があることがわかります。しかも彼は、古代人に倣って、感覚的で具体的な身体性から、その基礎をなす理想的形態を抽象し、創造に適用できる法則性を見出そうと努めています。こうした探求態度は、彼が幼い頃に、植物好きの父に連れられてスイスの山野を歩きまわり、自然に感動したときから培われていたようです。そのときすでに彼は、自然がもつ正確で根本的な形態を感じたといえます。ル・コルビュジエは、ある意味で頑固に初心を貫き通し、自分の探求をさまざまに異なる形で表現しながら、最後に己の原点にたち戻ったのかもしれません。